

グローバル化した世界と創価学会

カレル・ドベラーレ
平良 直 訳

私が本稿で検討することは次のことである。まず、創価学会のグローバルな特徴を吟味する。そのうえで、SGIがなぜ西洋世界全体に広まったのかを説明するいくつかの理由を示したい。そして最後に、宗教組織の社会活動に焦点を絞って宗教と社会との関係性について論じてみたい。

我々はグローバル化についてしばしば耳にしたり、読んだりする。しかし、人々がこのグローバル化に言及するときどのような意味で用いて

いるのだろうか（Voys, 1998: 71 72頁参照）。

ウォーラーSTEINはマルクス主義的ビジョンをもっていた。彼は、資本主義が発達した世界規模の経済を引き合いに出し、市場経済は地域や国々の不平等を増大させるものとなり、もはや国家がその不平等をコントロールできなくなっていると述べている。このことは、たとえば、低賃金の労働や公害に関する厳格な法律が少ない国々に生産工場が移されている諸工業の脱現地生産化について考えてみれば明らかである。

社会学者ルーマンは、コミュニケーションのグロー

バル化について触れ、我々は全世界どこであつても通信が可能でグローバル化した世界のなかにあるのだとしている。インターネットはこのことの良い例である。私はベルギーの小さな村で自分のコンピュータの前に座り、日本、オーストラリア、北・南アメリカ、東・西ヨーロッパなど世界中の同僚たちと日々通信しながら、ザグレブやクロアチアの国際会議を統括している。

グローバリゼーションを分析した社会学者ギデンズがいうように、我々の社会関係は時間と空間の制限から自由である。このような社会のコミュニケーションにおいては、空間はさほど重要な意味をもたない。さらに我々はそれがどの時間帯かということも関係なくコミュニケーションができるのである。結果として、世界のある場所において起こっている事柄が全世界に影響を及ぼすようなグローバルな依存関係が生じることとなる。このことは九・一一のテロ、大気汚染と京都議定書などを想起すればよい。

社会学者ロバートソンはまた、グローバリゼーション

は、地域的なパティキュラリズム（特殊主義・個別主義）を刺激するものであると指摘している。このことは、ヨーロッパにおいて、地域主義が政治の重要な要素となつていくことからわかる。大きな領域のなかに統合されたヨーロッパでは、多くの地域が、地域の独自のアイデンティティを再認識するという形で、より身近なレベルでの統合を欲している。たとえば、スペインのバスク地域の独立問題があげられる。さらに、ベルギーのフランダース地域や、英国のウェールズとスコットランドの自治権拡大の要求などもその具体例である。

私はこれらの学者たちのグローバリゼーションに対するアプローチを、グローバル化した世界における創価学会の分析に援用してみたいと思う。

諸宗教のレベルでは、グローバリゼーションの概念は、宗教思想を普及させようとしてきた一部の運動によつてすでに用いられてきた。この概念は、全世界を統治するうえで、基礎をなすものでありつつけてきた

のである。ジエームズ・ベックフォード（2003：111-112頁）の指摘によると、エホバの証人たちは、「世界規模（グローバル）の思考と協力の恩恵は」、「神の啓示と聖書の原理に基づいた」統治が行われることによって、「真に世界規模の秩序が確立されてはじめて、理解可能になる」と主張しているとしている。さらに、バハイ教では、議会制民主主義は「グローバルな文明の政治のための適切なモデル」ではないものとされ、世界秩序は「宗教、政治、法律が慎重に融合され」たなかにこそ求められるべきものとされ、「すべては彼らが主張する倫理の普遍的原理によって統治されるべきだ」と主張している。このことからジエームズ・ベックフォード（2003：113頁）はまさにこのようなグローバルバリエーションの形態は「多様性よりは単一の形態を義務として課すもの」だと結論づけている。

創価学会はどうか

創価学会の信仰の中核をなす信仰理念は日蓮の遺文に展開された哲学に基づいた「人間革命」という考え

方である。この人間革命が平和を促し、唱題と指導を通して、菩提の境地を獲得した人々によって持続可能な発展ができるのだとされている。私は、創価学会の実践の分析を行うなかで、その実践が、社会的支援の枠組みのなかで自己分析を刺激するものとなっているという事実を指摘した。実際、唱題や、社会的心理療法（social psychiatry）の機能を果たしている座談会、その他の会合など、創価学会の実践のなかには、自己誘導的心理療法（self-induced psychiatry）が組み込まれている。とはいえ、これらの実践を単に二つの心理療法に還元すべきではないだろう。「そうすることは聖なる要素、すなわち、宗教的対象をまえに行われる曼荼羅（御本尊）への唱題が醸し出す聖なる雰囲気やムードを捨象し、その実践を自己分析や社会的支援に還元してしまふことになる」（Dobbeleir, 2001：56頁）。

この人間革命の実践を支援する傍ら、創価学会は幼稚園から大学までの一貫した教育プログラムを構築し、日本のみならず、英国、フランス、イタリア、ドイツ

など諸外国において文化センターを設立した。さらに、人々が戦争を回避し、生命を尊重し、環境を守ることが

ができる共通の哲学的な基盤を見いだすことを目的とするポスト二十一世紀センターのような研究所を設立した。池田名誉会長は毎年「平和提言」を発表し、軍縮と対話、そして諸問題を解決する国際法の設置や持続可能な発展、グローバルな倫理に関する提言を行ってきている。このような倫理を普及させるために、彼は世界中の政治家、科学者、哲学者等と対話を展開し、その成果を出版している。定期刊行物を通して、創価学会はこれらの運動を地域のSGI刊行物としてメンバーのために再掲載したり、あるいはメンバー以外の人々への啓蒙のために刊行したりしている。また、創価学会は世界中で、国連やユネスコとの共催で、企画展を開催することによって平和と人権のための運動を展開している。このように記述してきたところで私は最初の結論を提示したい。すなわち、その結論とは、我々は創価学会を、ルーマンがグローバル化の定義において言及した全世界的なコミュニケーション

ン体系をもったグローバルな宗教運動であることができるといふことである。

しかしながら、先述のロバートソンが述べたことからすれば、創価学会はパティキュラリズム（個別主義・特殊主義）から生じる緊張によって特徴づけられる面があるといわねばならない。世界中に布教が進み、異なった文化的背景をもった国々で定着していくなかで、伝統的な日本の運営方法、組織化、考え方と、その固有の文化との間で諸問題が生じることがある。地域的にこの問題は、SGIが地域の文化に順応することを強いる緊張を創り出している（Dobbelaer, 2001: 28頁、78-79頁）。御本尊のまえに正座をする日本式の実践は、日本人が幼少時代から行っている座り方であるが、椅子にすわる伝統を有する西洋人には、御本尊に敬意を払う方法としてそぐわないのである。日本において典型的であるジェンダーによる組織的な分離は、英国では一部の支部において廃止されている。このようなジェンダーによる組織の分離は、英国のみな

らずカナダや他のヨーロッパの国々においても大きな問題である。合衆国においてなされたハモンドとマハチエク(1999: 34頁、96-102頁)による研究では、合衆国SGIの草創期の組織は日本をモデルとし、目上のものがリーダーに指名され、強硬な折伏が行われ、大規模なデモンストレーションが行われていた。現在では、合衆国のリーダーは「仲間とリーダーたちの双方によって指名され、再検討され、そして承認される」プロセスを経て選出されるようになってきている。もはや能力のある女性が責任のある立場から排除されることはなくなっている。パレードやフェスティバルなどの人目をひく活動は、現在では芸術展の後援や文化的展示のような、より中立的な公共的キャンペーンを行う形に移行してきている。ドイツにおいては、新しいメンバーが入会すると同時にやめる会員が出てしまい、数が増えたぶんだけ減少するという形で会員数が伸びていない。会員たちは一部の日本人リーダーたちの組織スタイルと、地域の会員たちの相談が欠如していることに不満を述べるようになってきている。イタリア

においても会員たちによる批判が表明され、その結果学会の哲学の核心部分に対する疑問はないものの、実質的な会員数に部分的な崩壊が生じたことがあった。ドイツにおける「指導」の実践は、近年の歴史的過去の反省をもとに、メンバーを引き戻す効果をあげてきている。

私が述べてきたこれらの小さな変化は、各国の支部がある種の事柄においていくらか自律的であることが許されていることを示している。しかしながら、創価学会全体を統制する中心は日本にあり、運動の指導者はほとんど日本人である。述べてきたような局面からいえることは、創価学会はある程度、「国家を超えた運動」であるということである。この点では、ベックフオード(2003: 115頁)の分析の結論を肯定することになる。創価学会の運動が、グローバルなものとなることを望むならば、機構的に「脱日本化」をしなければならぬ。そのためには、創価学会は、他の諸文化に彼ら自身のやり方で行うことを許容しながら、さらに

東洋哲学研究所のような研究センターを刺激し、日本の文化的特異性を脱しつつ日蓮の教えの核心を探究しなければならぬと考える。これこそ、創価学会が「グローバルイノベーション」を実現する道であり、グローバルな思考と地域的な表現とを結びつけるものである。そしてこのことは創価学会にとって絶対不可欠なことであるばかりでなく、たとえばカトリシズムがこの問題を「文化化(enculturation)」の問題としてきたように、グローバルな宗教であろうとするすべての宗教にあてはまるものである。

西洋世界におけるSGIの成功をいかに説明するか

ウォーラスティンはグローバルイノベーションへアプローチするなかで、資本主義によるグローバル経済の負の効果を指摘している。すなわち、職の喪失、ストレス、心理的不安、将来への不安などである。これらの負の局面は人々に救いを渴望させるものである。故ブライアン・ウィルソンと私自身が行った英国での調

査によれば、創価学会に入会する人々は「宗教探求者(religious seekers)」ではなかった。彼らは、彼ら自身の日常の問題の解決を求めている人たちだったのである。活き活きと輝くSGIの女性や男性メンバーたちは問題の解決を求める人々を魅了する。SGIにおいて、これらの問題解決の探求者たちは哲学と実践を学ぶ。哲学の中核をなす因果の法は人間の責任を重要視する。人間自身に起こっていることは、過去において行われたことの結果であると説かれる。この法はさらに人間のおかれた状況は変革することが可能なのだという事実を説く。実践を通じて、人々は彼ら自身の問題を分析し、その原因を探究するのである。そして、他を非難するのではなく、自己自身を問題の解決のために見つめるように促されるのである。実践は実際、呪術ではなく、実践者自身に対して次のような問いを要請する。「なぜこれらの問題が存在するのか。自分が前に進むことを妨げているものは何か」。この実践は、脱近代の状況が重視する自己実現と自己内省にきわめてうまく適合するものである。この実践はまた、人々自身に

よる決定を重要視し、彼／彼女らが環境を変革していくことを促す。すなわち、人々に元気を与えるのである（Dobbeleer, 2001 : 37, 57頁）。会員たちはグループのなかで、特に座談会における、彼ら自身が変わるための支援があることを見いだす。そして、創価学会は、自らの姿を鏡に映しだしてみることができるといふような、神秘的な手段を提供し、人々の問題を解決し、会員たちが相互の支援を与えあうのである。

人々が彼ら自身の文化の外側、すなわち仏教に解決を求める前に、変化は彼ら自身の文化のなかに起こっていたはずである。西洋文化におけるどのような変化が、西洋におけるS G Iの成功を可能にしたのだろうか。西洋において、世俗化の過程は一九六〇年代以降から始まり、西洋の伝統的な宗教であるキリスト教の影響力は大きく減退していた。キリスト教の核心である個人としての神への信仰は少数者の信仰になってしまっている。それに代わって、大多数はむしろより高次の力への信仰をもつようになっていく。そのような

信仰が仏教の神秘なる理法（Mystic Law・妙法）の信仰へと入る敷居を低くしていることは確かである。天国に召されるか地獄での責めを負うかということに関する来世への信仰も影響力が小さくなっている。それゆえ、人々の気質は、現在の生活に有益なものはずべて手に入れるということが心をひきつける最大の関心となっているのである。このような文脈のなかで、この世界における楽しみだけが有用なのだという強い信仰が広がったところに、現世の生活を永続させようとする欲求、あるいは繰り返し返そうとする欲求が、来世に生まれ変わるといふ概念をますます魅力的なものにしてきたのである。

西洋では、信仰のみならず、倫理もまた変化してきている。西洋を特徴づけてきたキリスト教は、過去には日常的であった貧しさや剥奪の状況にうまく順応した。その倫理は禁欲主義を主張するものであった。慎重さは、個人の生活において道徳的秩序の実質的な試金石であった。しかしながら、消費経済への変化が

生じると、儉約を旨としたこの倫理はさほど有効なものではなくなってしまう。新しい秩序は消費することの正当性を要請した。すなわち、自己実現と楽しみを追求することを促す倫理を要請するようになったのである。この新しい倫理は、広告と娯楽産業のなかにまさにそのような価値体系を促進する媒介物を創り出すのである。これらの媒介物はそれら自身、伝統的なキリスト教のメッセージを徐々に弱体化させることに有効に作用し、やがて、キリスト教教会が説き伏せることができる範囲を超え、メディアを統制することができないほど大きな力をもつようになったのである。

創価学会は、古代の聖なる經典に依拠しつつ、我々の時代、すなわち、彼らの言葉でいえば「末法」の時代に対する格別な関わり方を要請するメッセージをもっている。このような関与の仕方は、一般的な現代的傾向である経済問題へと集中することのなかに明白である。また、創価学会が組織の道徳律を教条化せず、一般的で抽象的な倫理的原理を支持することによって

社会的寛大さを示したことに現代の時代への特殊な関与の仕方が顕在化している。信奉者たちには、このことよって、彼ら自身が「責任を引き受ける」形態を自ら見いだしていく自由が残されるのである。その倫理は、個人の幸福の探求が保証されるものとなり、そして個人の自己実現が重要視されるものである。脱キリスト教化した西洋の世俗的エートスを実質的に擁護する倫理なのである。創価学会の多くのメンバーが、マス・メディア、娯楽産業に関与する者や、芸術的探究に従事する人によって構成されている。彼らがいる場は個人の自由と自己表現の要請が常に重要となるところであるが、彼らがメンバーとして存在することは、運動の印象が強化されるのである。その運動においては、新しい倫理が体験を確かなものとし、入会する人々の要求を満足させるのである。このように、個人の態度に即しつつ時代の要請に順応したのが創価学会の運動なのである (Wilson and Dobbeleare, 1994: 217 221頁)。

結果的に、我々の第二の問いに対する答えは、我々の調査に基づき、次のようになる。すなわち、創価学会は、人々が生活をコントロールすることができる秘伝的な手段を提供し、救済を必要とする人々を魅了するものであり、そして創価学会の信仰と倫理はキリスト教の信仰が減退することによって生じた真空を埋めるものであった。個人的な神に対するキリスト教の信仰の減退は多くの人を神秘的な理法の信奉者にする傾向を生じさせた。天国と地獄への信仰の減退はまた、多くの人にとって期待される来世への再生の信仰を生じさせることになった。創価学会の倫理は、来世の再生を期待させる自己実現の世俗的エートスを実質的に擁護するものとなったのである。

宗教的下位体系とその他の下位体系

創価学会のエートスが、自己の実現、個人の幸福の達成、個人の潜在的能力の開発と、菩提の境地を獲得することを強調するものであるならば、創価学会はまた、改善されるべきものとしての世界に対するポジテ

ィブな態度を刺激するものでもある。我々は現在機能的に分化した社会のなかに生きている。すなわち、経済、政治形態、家族、法律体系、教育、そして医療の領域などに分化した社会である。これらのすべての下位体系は、宗教的規範とは関係なく自律的に機能している。したがって、宗教体系はその包括的な機能を失ってしまっているのである。社会の世俗化ということはこのことを意味する。このような社会にあっては、宗教的下位体系はその特権的立場を失っている。とはいえ、いまだ個人にとっては意味と儀礼を供与するものであるということではあるだろう。たとえば、一年のなかの祝い事などがそれである。寺院を訪れることや神社への新年の参詣などもその例であろう。あるいは通過儀礼、その他、七・五・三のお祝いや結婚式や葬式などもそれにあたる。しかし、宗教は他の下位体系が義務を負っているように、社会にとっての重要性をもまた証明しなければならない。たとえば科学はその重要性を経済と医療に対して奉仕することによって証明している。社会の他の下位体系に奉仕すること

が実際上のその唯一の方法なのである。創価学会のリーダーたちはそのことを理解している。このことを理解しているがゆえに、彼らは教育や文化や政治を通じて奉仕するのである。ほとんどの宗教はこのことを行っている。

西洋ヨーロッパ社会において宗教は教育を提供してきた。子ども、若者、大人のための運動を組織化し、健康保険を提供し、さらに病院を経営していることなどがその例である。新宗教運動もまたこのことを実践している。たとえば、サイレントロジューは薬物中毒者と囚人に対して奉仕活動をしている。また、セブンス・デイ・アドベントリストのような教派運動などでは教育と病院を組織化している。一部の宗派では高速道路で車から投げ捨てられたゴミを収集する小さな運動を展開している。私の妻と私が、妻の母を訪問したとき、「高速道路のこの区間はモルモン教徒によって定期的に清掃されています」という看板を見たことがある。もしモルモン教徒がそれを「宣伝」するものであるとすれば、それは、彼らが一般社会に対して行って

いる奉仕活動を認知されたいと欲していることを意味しているのである。

創価学会は社会に対して多くの奉仕を行っている。私はすでに創価学会の教育体系とSGIが主催する人権と戦争の恐ろしさに関する有益な展示について述べた。私はさらに地震が起こったときになされた緊急援助とアフリカで戦火に引き裂かれたなかでの救済の努力と医療介護が創価学会によってなされたことについても言及することができる。さらに環境に関する奉仕もまた触れることができる。創価大学の自然環境研究センターはブラジルのアマゾンの研究センターと協力してアマゾン川流域の熱帯林の回復に尽力している。創価学会は貧しい国々や、学校や大学に科学書や機器を提供し、彼らの教育環境の改善に貢献している。また日本人の大学生に奨学金を与え、国際交流プログラムの資金提供を行っている。これらの活動は、人間の生活状況を改善するという創価学会の目的に合致するものなのである。

しかしながら、創価学会は社会への奉仕をほとんどの宗教運動とは異なるやり方で行ってきた。関連団体（corporate channel）は、出版社、教育施設、文化団体と文化プログラム、そして子ども、青年、成人のための諸団体などによって構成され、さらに日本の政治的な団体と結びついている。ステイン・ロツカンの定義によれば、創価学会は、西欧に存在するものと比較するといまだ胚芽的なものであるが、一つの制度化された中心軸を構成している。過去五十年にわたって、創価学会が関わる党は地方レベルで機能しつづけてきている。そして、四十年間、国政レベルで、平和、軍縮、市民の福祉と信教の自由への関与によって特徴づけられる政党と創価学会は深く関わってきた。このように、関連団体と、宗教としての創価学会は政治的な影響力をもつに至っている。いまだは公明党が連立政権に入るまでになっているのである。宗教組織としての創価学会とその関連団体との関係の機能についての研究は興味深いものとなるだろう。最終的に創価学会

の国際的レベルでの政治的な関与は主に国連とユネスコの枠組みのなかで達成されている。たとえば、創価学会はNGOとして、リオ・デ・ジャネイロで行われた環境問題と持続可能な発展に関する国連の世界サミットに参画した。この会議への準備のために、創価学会は英国のタブロー・コートで予備的な会議を行ったのである。

多くの他の予備的な会議では政治的、経済的、科学的な問題と、これらの諸問題を解決する技術的な方法論が議論されたが、タブロー・コートでの会議は、創価学会のビジョンに合致して、エコロジーに対する良心の涵養とその宣言を行うことを中心に議論するものとなった。その会議の宣言では、「環境に関わる倫理は、我々の共通の未来の核心をなすものであり、政治的な運動が色あせ、経済システムが変化し、イデオロギーが衰退し忘れ去られても、順守されるべきである」と謳われた。その宣言書では精神的な価値、文化的貢献、宗教間対話、そしてエコロジカルな倫理の涵養のため

の教育、そして、女性と若い人々が重要な役割を演じることなどについて実に様々な主張が織り込まれている。出版されたその宣言書の序文で、池田SGI会長は、環境保護政策を実行するうえで地域住民の果たす役割の重要性を強調した。これらすべての提言は、「人間革命」の精神に符合している。創価学会の哲学によれば、この精神こそ、社会変革の大きな原動力となるのである。

我々は、創価学会が、宗教として、平和と持続可能な発展を促進する原動力となると結論としてもよいと思われる。創価学会は、通信情報伝達とその国際的な行動のレベルにおいてグローバルな体制を有する超国家的な組織体である。さらに、そのビジョンを発展普及させるだけでなく、創価学会にはそのビジョンを実行することを支援する組織化された実践者たちがいるのである。

参考文献

- Beckford, J. (2003). *Social Theory and Religion*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dobbelaere, K. (2004). *Soka Gakkai: From Lay Movement to Religion*. Salt Lake City: Signature Books.
- Hammond, P. E. and D. W. Machacek (1999). *Soka Gakkai in America: Accommodation and Conversion*. Oxford: Oxford University Press.
- Rokkan, S. (1977). 'Toward a generalized concept of "verzuijing": a preliminary note, in *Political Studies* 25: 563-570.
- Voyé, L. (1998). *Sociologie: Construction du monde, Construction d'une discipline*. Paris/Bruxelles: De Boeck & Larcier.
- Wilson, B. and Dobbelaere, K. (1994). *A Time to Chant: The Soka Gakkai Buddhists in Britain*. Oxford: Clarendon Press.

(カレル・ドヘラーレ／国際宗教社会学会元会長)
(たいから すなお／東洋哲学研究所研究員)

(本稿は二〇〇五年三月二十九日に行われた当研究所主催の公開講演会の内容に加筆いただいたものです)

